15-24 剰余価値は全資本主義的生産の理解のための鍵を提供する

「われわれがいま剰余価値と呼んでいる生産物価値部分の存在は、マルクスよりもずっと前から確認されていた。また、それがなにから成っているかということ、すなわち、それにたいして取得者がなんの等価も支払っていない労働の生産物から成っているということも、大なり小なりの明瞭さで述べられていた。しかし、それから先には進まなかった。一方の人々――古典派ブルジョア経済学者たち――は、せいぜい、労働生産物が労働者と生産手段所有者とのあいだに分配される量的関係を研究しただけだった。他方の人々――社会主義者たち――は、この分配の不公正なことを見いだして、この不公正を除去するためのユートピア的手段を探し求めた。彼らは両方とも、自分たちの前にあるがままの経済的諸範疇にとらわれていた。

そこにマルクスが登場してきた。……マルクスが見たのは、……ある一つの経済的事実の単なる確認とか、この事実と永遠の正義や真の道徳との衝突とかが問題なのではなく、全経済学を変革する使命をもつ一つの事実が問題なのであり、この事実こそは全資本主義的生産の理解のための鍵を――その使い方を心得ている人に――提供するものだということだった。……彼は、不変資本と可変資本とへの資本の区別を確認することによって、はじめて剰余価値の形成過程をその現実の過程の最も微細な点にいたるまで示し、こうしてそれを解明することに成功した。……さらに彼は剰余価値そのものの研究を進めて、その二つの形態、絶対的剰余価値と相対的剰余価値とを見いだした。そして、これらの形態が資本主義的生産の歴史的発展のなかで演じてきた別々な、しかし両方とも決定的な役割を明らかにした。彼は、剰余価値の基礎の上に、労賃に関してわれわれのもっている最初の合理的な理論を展開し、また、はじめて資本主義的蓄積の歴史の輪郭とこの蓄積の歴史的傾向の叙述とを与えた。」〈 **大月版『資本論』**③ P24F6-26F3　エンゲルスの序文 〉